

小学校中学年段階におけるネット型ゲームの学習指導に関する一考察

A Consideration about the learning instruction of net games in middle grade in elementary school.

1 K 0 8 B 0 5 0 - 4 柿沼 千明

指導教員 主査 吉永武史先生 副査 関一誠先生

【研究の目的】

文部科学省は平成20年に学習指導要領を改訂し、体育科においても大幅に変更された。新学習指導要領で内容が大きく変更された領域として「ゲーム」(低・中学年)があげられる。今回の改訂では、種目固有の技能ではなく、攻守の特徴や「型」に共通する動きや技能を系統的に身につけるという視点から種目を整理し「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」で構成された。中学年の「ネット型」を「ソフトバレーボールを基にした易しいゲーム」及び「プレルボールを基にした易しいゲーム」で構成した。旧学習指導要領では、中学年の内容として、バスケットボール型ゲーム、サッカー型ゲーム、ベースボール型ゲームのみが取り扱われていたの、ネット型ゲームは明示されていなかったが、今回の改訂によって、プレルボールを基にした易しいゲーム及びソフトバレーボールを基にした易しいゲームが新たに明示された。小学校中学年段階では、ネット型ゲームを初めて学習することになるので、比較的個人の技能差がないプレルボールを採択し、基本的なボール操作の技能を習得し、ラリーを続けることや連係プレーを行う楽しさや喜びを味わうことで、ネット型ゲームに対する愛好的な態度が育まれるのではないかと考える。

本研究では、小学校中学年段階におけるネット型ゲームの新学習指導要領に示された「プレルボールを基にした易しいゲーム」を体育授業で実践し、児童の技能ならびに態度の変化について分析することで、有効な学習指導を検討し、今後のネット型ゲームの可能性について明らかにするために考察していくことを目的とした。

【研究の方法】

2011(平成23)年2月17日～3月8日にかけて、関東圏内の公立小学校の第3学年24名(男子13名、女子11名)のプレルボール未経験の児童を対象に学習指導プログラムを適用する。最初に、診断的授業評価を用いて児童の実態把握を行い、8時間授業で「プレルボールを基にした易しいゲーム」の単元を展開し、形成的授業評価ならびにゲームパフォーマンス評価を用いて、児童の学習成果を確認していく。ゲームパフォーマンス評価については、相手への返球率、プレイ回数、ラリー回数、パスの連係率の4点を評価項目として設定し、毎時間のメインゲームを分析対象とした。単元終了

後には、総括的授業評価を用いて、児童の体育授業に対する態度形成をチェックし、中学年における本単元の効果を検証した。

【結果】

診断的・総括的授業評価に関しては、いずれの観点も単元前から高い評価であったが、情意目標を除いて認識目標、運動目標、社会的行動目標においては得点が有意に高まっている。情意目標に関しても点数は下がっているが、評価点が下がるまでの変化は認められなかった。合計得点を見ると、55.87点から57.71点まで向上しており、総合的に態度の向上が認められる。

形成的授業評価に関しては、単元進行に伴って右肩上がりに評価が高くなっていることが窺える。単元前半の1時間目と、単元後半の8時間目で比較すると、総合評価、「成果」次元、「学び方」次元、「協力」次元は高まり、「意欲・関心」次元においては数値として下がってはいるが、終始高い評価が続いており、特に単元中盤では数値の高まりがみられた。以上のことから、本研究で実施した「プレルボールを基にした易しいゲーム」の授業は児童の体育授業に対する愛好的態度を高めることに結びついたといえる。

ゲームパフォーマンス評価に関しては、分析した4項目すべてにおいて、技能の向上が見られた。単元進行に伴い、基本的なボール操作を習得し、パスをつなげるようになり、徐々にラリーが続けられるようになった。しかし単元終盤には、すべての項目において技能が低下している。これは強いアタックやスペースを狙ったアタックが打てるようになり、それに対応するレシーブが習得できていなかったからだと推察できる。

【考察】

態度成果・技能成果によって、今回実施した学習指導プログラムは小学校3年生段階において有効だということが言える。今回のようにボールを柔らかいものに変えるなどの用具の工夫や、コート規格、ゲームの人数やサーブの投げ入れなどのルール工夫をすることによって技能の高まりがみられたので、児童が取り組みやすい工夫が必要である。今後4年生段階における学習可能性も検討することで、中学年段階における学習指導プログラムを確立する。

